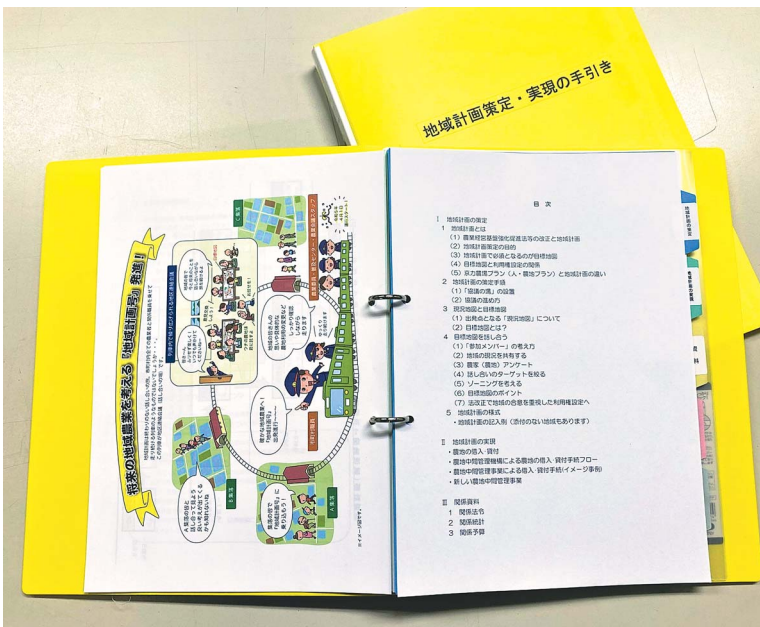


話し合いで「農地の将来像」描き具体化へ

地区連絡会議

地区連で「地域計画策定・実現の手引き」活用を！

4月1日から改正農業経営基盤強化促進法が施行され、地域の話し合いで農地利用の将来像を決める「地域計画」を策定する取り組みがスタートした。



地域計画づくりのポイントを解説した「手引き」

府内全市町村で2年後の2025年3月末までに策定作業を進めるため、京都府農業会議と京都府は「地域計画策定・実現の手引き」を作成し、府内の農業委員会委員713人と関係機関の担当職員に配布した。

地域計画では、おおむね旧村ごとに地域農業の将来を話し合い、目標地図で農地1筆ごとに将来の耕作者を明確にしている。

農業委員会は、策定エリアごとに地区連絡会議を開催し、農地の現況把握や農業者の意向確認など、担当地区での農地利

市町村の資料も加え説明会に携行を

今回の手引きは、Ⅰ（地域計画の策定編）、Ⅱ（地域計画の実現編）、Ⅲ（資料編）の全3編で作成。地域計画の策定は、各市町村が地域の現実に応じて進めるため、必要な資料を追加できる加除式リングファイルで作成されている。

手引きが届いた市町村からは「計画策定までの手順やポイントが分かりやすいので、今後の説明会や話し合いで活用していきたい」など、今後の取り組みに弾みがつくこと評価する声が相次いでいる。

「地域計画」策定に向けて年4回「活動強化月間」を設定

京丹波町農業委員会

京丹波町農業委員会は4月6日の総会で本年度の活動目標を協議し、年4回「活動強化月間」を設けて現況地図作成や地域の話し合いを推進する「最適化活動の目標」を設定した。

来年2月の改選前に今年度の委員で成果を出すため、「現況把握月間」（11～12月）を中心に、「最適化活動継続月間」（1月）にまとめた引継書の作成を行う計画だ。

の話し合いは「情報共有月間」（11～12月）を中心に行って、「最適化活動継続月間」（1月）にまとめた引継書の作成を行う計画だ。

農業委員会の山田進会長は「町と連携して農業者（出し手・受け手）の意向把握や目標地図の素案作成などの活動を強化していきたい」と意欲的だ。

活動日数の増加に対応

条例改正で委員報酬を改定

京田辺市・木津川市

改正農業経営基盤強化促進法の施行に伴い、地域計画策定に向けた農業委員の活動日数の増加に対応するため、市条例を改正して4月から委員報酬を引き上げた。

京田辺市では農業委員と推進委員が同額で年40万2千円（55％増）に、木津川市では農業委員が年24万2千円（44％増）、推進委員が年22万円（64％増）に改善され、農業委員会から市長に要望した「活動日数の増加に対応した引き上げ」が実現した。

環境制御型ハウスで高収益を追求



北澤良祐さん（前列右）、妹の志賀紗矢香さん（同左）とパートナー

城陽市

北澤良祐さん

城陽市平川地区でトマトを中心に栽培する北澤良祐さん（40）は、温度・湿度・炭酸ガス濃度・光量・給液量などの栽培環境を自動制御できるハウスを3年前に新設し、省力化と収量アップで「儲かる農業」を追求している。

現在は、北澤さんの妹とパートナー2人で、「京愛娘」などミニトマト2種と大玉1種を周年生産し、J・Aを通じ契約販売を行い、取引先のスーパーから高い評価を得ている。

「多くの消費者に美味しさと評価されるトマトの安定生産によって高収益を実現し、法人化も視野に入れて経営したい」と今後を展望する。

若手の農地利用最適化推進委員としても活動する北澤さんは、地域計画づくりの話し合いや農地の集約化に力を入れており、「若い担い手を育てる農業振興の取り組みに全力でがんばりたい」と抱負を語る。

（城陽市農業委員会）

宇治茶実践型学舎1期生が活躍

南山城村に移住し、昨年、茶農家として就農した谷口義昌さん（26）。

京都府農林水産業ジョブカフェで勧められた茶業インターン研修をきっかけに、京都府茶業研究所の「宇治茶実践型学舎」1期生として座学や圃場作業などを2年間学び、先輩農家の紹介で高尾地区の茶園を借りて独立就農した。

現在は、村内の先輩農家を手伝いながら、自身でも茶園78坪を管理している。初年度は稲害や害虫被害で反収が目

南山城村 谷口義昌さん



茶園で作業する谷口さん（昨年9月）

「辛い時期もあったが、応援してくれる先輩たちのアドバイスを活かして茶園管理を徹底し、村を代表するような生産者になりたい」と意気込む谷口さん。

やる気のある若い茶農家の将来と、茶業の発展に、村は大いに期待している。

（南山城村農業委員会）

農deきらきら



特製たい肥で美味しい野菜を！

京丹波市 千豊農園 安田豊子さん

京丹波市大宮町奥大野 野菜づくりをお姉さんとの「千豊農園」の安田豊2人で始め、多品目をほば種から育てています。農業・無化学肥料によるこだわっているのは、



安田豊子さん（右）と姉の太田千鶴子さん

米ぬか・もみから・おがくずで作った手づくりたい肥です。このたい肥を入れると野菜が美味しく甘くなり、お客さまから「他の野菜とは全く別もの」と反響があったり、農園を訪ねて来られる方もあるそうです。

化学肥料を使わないためゆっくり成長し、無農薬なので野菜に虫が多くつくこともありますが「環境に優しく安心なものを子どもたちに食べてほしい」という思いでがんばっています。

エディブルフラワ―（食用花）や観賞用の麦も栽培しています。

「大好きな野菜づくりで毎日忙しいけれど、楽しくあつという間に1日が過ぎてしまつ」とやさしい笑顔が印象的でした。

（京丹波市農業委員会 青木美恵委員）